LIBRARY

いわき総合高校図書委員会　平成３０年１月号

今月のオススメ

≪ **半透明のラブレター** ≫　著者：春田　モカ

もし、愛する人の心が読めたらどうしますか？　もし、愛する人の記憶が消えたらどうしますか？

「俺は、人の心が読めるんだ。」　高校生のサエは、クラスメイトの日向から、ある日、衝撃的な告白を受ける。休み時間はおろか、授業中でさえも寝ていることが多いのに頭脳明晰という天才・日向に、サエは淡い憧れを抱いていた。ふとしたことで日向と親しく言葉を交わすようになり、知らされた思いがけない事実に戸惑いつつも、彼と共に歩き出すサエ。だが、その先には、切なくて儚くて、想像を遥かに超えた”ある運命”が待ち受けていた・・・・。

この作品をオススメに選んだのは、２人の主人公がどちらも高校生で、季節も冬で、今にピッタリだと思ったからです。人の心を読むことができるから、知りたくなかったことを知ってしまったり、逆に知ることで相手の気持ちがわかったり・・・・。とても感動的な話なので、ぜひ読んでみてください。　（ＲＴ）

カズオ・イシグロ 特集　2017 年度 ノーベル文学賞受賞 !!

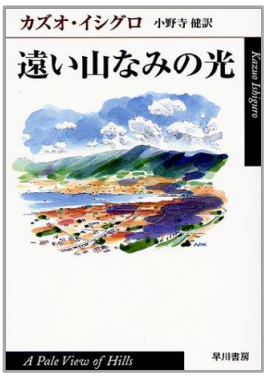
2017 年のノーベル文学賞は、日本生まれの英国人作家カズオ・イシグロさんが受賞しました。イシグロさんは日本人の両親も下で長崎市に生まれ、５歳で渡英しています。日系人ということで、連日、ＴＶや新聞等で取り上げられ大騒ぎでしたね。本国でも大騒ぎ？ と思いきや、英国では意外にも静かな反応だったそうです。授賞式の翌日、式典や晩餐会スピーチの様子を報じた新聞はなかったそうです。文学賞の受賞が決まった時も、一面で報じたのは１紙だけだったそうですよ。それは英国人が自国の文化に自信と誇りを持っており、海外の評価を気にしないからではないか、と言われています。本ならば、ノーベル文学賞よりも英国最高峰のブッカー賞の方が話題になるそうです。イシグロさんも３作目の『日の名残り』でブッカー賞を受賞しています。書店の反応も、日本とは対照的だったようです。受賞発表後ロンドン市内の大小１０の書店で、特設コーナーがあったのは一つだけだったとか。それも奥まった目立たない場所に。村上春樹さんの翻訳本コーナーの方が大きい書店も多かったそうです。

その村上春樹さんとの交流も話題になりました。お二人は東京やロンドンでも２、３回会っているそうです。意外にも、作家同士の会話は些細な話題だとか・・・・。サッカーや他のスポーツ、ジャズの話などをするそうです。（注：村上春樹さんは専業作家になる前、ジャズの店を経営していました）　受賞が決まって直ぐのBBC(英国放送協会)のインタビューでも村上春樹さんの話をしていましたね。ほかにも、イシグロさんは「現代作家の中では、好きな作家はたくさんいますが、村上春樹はもっとも興味のある作家の一人ですね。」と語っています。（2013年出版 PHP新書『知の最先端　大野和基インタビュー編』より）

村上さんも、「新しい小説が出るたびにすぐに書店に足を運び、それを買い求め、ほかに読みかけの本があっても途中でやめて、なにはさておきページを開いて読み始めるという作家が何人かいる。それほど多くの数ではない、というか現在の僕の場合、ほんの何人しかいないわけだが、カズオ・イシグロもそのような作家の一人である。」、「僕はこれまでイシグロの作品を読んできて、失望したり、首をひねったりしたことが一度もない。」、「一人の小説読者として、カズオ・イシグロのような同時代作家を持つことは、大きな喜びである。そして一人の小説家として、カズオ・イシグロのような同時代作家を持つことは、大きな励ましになる。彼が次にどんな作品を生み出すのか、それを思い描くことは、自分が次にどんな作品を生み出すことになるのか、それを自ら思い描くことでもある。」と語っています。（『村上春樹　雑文集』より 2010年3月英国で出版された、カズオ・イシグロの研究書の序文として書かれたもの）　カズオ・イシグロさんと村上春樹さんは、同時代の作家として互いに意識し、リスペクトしているのがわかりますね。

作 品 紹 介

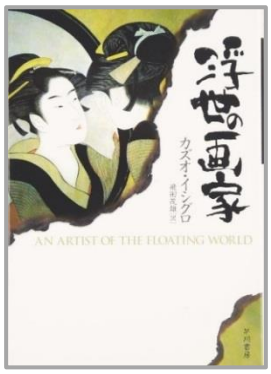
1982年 王立文学協会賞受賞作品



≪ **遠い山なみの光** ≫　著者：カズオ・イシグロ　　小野寺　健 訳

故国日本を去り英国に住む悦子は、娘の自殺に直面し、喪失感の中で自らの来し方に想いを馳せる。戦後まもない長崎で、悦子はある母娘に出会った。あてにならぬ男に未来を託そうとする母親と、不気味な幻影に怯える娘は、悦子の不安をかきたてた。だが、あの頃は誰もが傷つき、何とか立ち上がろうと懸命だった。淡く微かな光を求めて生きる人々の姿を端正に描くデビュー作。王立文学協会賞受賞作。

1986年 ウィットブレッド賞受賞作品

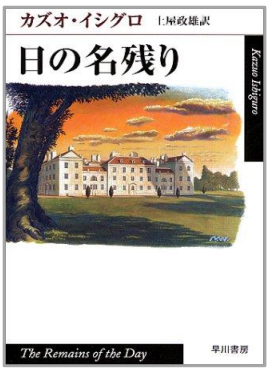


≪ **浮世の画家** ≫　著者：カズオ・イシグロ　　飛田　茂雄 訳

戦時中、日本精神を鼓舞する作風で名をなした画家の小野。多くの弟子に囲まれ、大いに尊敬を集める地位にあったが、終戦を迎えたとたん周囲の目は冷たくなった。弟子や義理の息子からはそしりを受け、末娘の縁談は進まない。小野は引退し、屋敷に篭りがちに。自分の画業のせいなのか・・・・。

老画家は過去を回想しながら、みずからが貫いてきた信念と新しい価値観のはざまに揺れる・・・・。ウィットブレッド賞に輝く著者の出世作。

1989 年 英国最高峰ブッカー賞受賞作品



≪ **日の名残り** ≫　著者：カズオ・イシグロ　　土屋　政雄 訳

人生の黄昏どきを迎えた老執事が、旅路で回想する古き良き時代の英国。長年仕えた先代の主人への敬慕、女中頭への淡い想い・・・・。忘れられぬ日々を胸に、彼は美しい田園風景の中を旅する。すべては過ぎ去り、取り戻せないがゆえに一層せつない輝きを帯びた思い出となる。執事のあるべき姿を求め続けた男の生き方を通して、英国の真髄を情感豊かに描いたブッカー賞受賞作。

2005 年 アレックス賞受賞　世界的ベストセラー作品

≪ **わたしを離さないで** ≫　著者：カズオ・イシグロ　　土屋　政雄 訳

優秀な介護人キャシー・Hは「提供者」と呼ばれる人々の世話をしている。生まれ育った施設ヘールシャムの親友トミーやルースも提供者だった。キャシーは施設での奇妙な日々に思いを巡らす。図画工作に力を入れた授業、毎週の健康診断、保護官と呼ばれる教師たちのぎこちない態度・・・・。彼女の回想はヘールシャムの残酷な真実を明かしていく。

日本で翻訳出版された当時、日本の翻訳・文学界で最も有名な翻訳家の一人である柴田元幸さんが、解説で「個人的には、現時点でのイシグロの最高傑作だと思う」と、本書を絶賛しています。

◎図書だより編集部より◎

カズオ・イシグロさんの他の作品には『充たされざる者』(1995 年)、『わたしたちが孤児だったころ』(2000 年)、『忘れられた巨人』(2015 年)があります。いずれも、長編小説ですべて早川書房から出版されています。長編小説を書くための習作としての短編小説もあるようですが、本来は長編作家です。今までの作品が長編 7 作品というのは、他の作家に比べると寡作ですね。ノーベル文学賞受賞作家の作品は難しいのではないか、と思われがちですがカズオ・イシグロさんの作品は比較的読みやすいと思います。ぜひ、これを機会に世界的な人気作家でもあるイシグロさんの作品に触れてみませんか。

余談ですが、イシグロさんから受賞決定後に長崎県と長崎市が送った祝福の手紙への返信が、１１月下旬に届いたそうです。英文タイプで書かれた手紙の最後には直筆のサインがしたためられていたそうです。12 月末現在、手紙を県は額に入れて知事室に、市は金庫に保管しているそうですよ。もう一つ余談を。イシグロさんのお嬢さんのナオミさんも父親と同じ小説家を目指しているそうです。イシグロさんは、20 歳の頃までは小説家ではなく、本気でロックシンガーになることを夢見ていたそうですよ。